

# 「詩篇における『道』の一考察」

津村 春 英

## 序

詩篇は旧約聖書の中にあつて古代イスラエル人のヤハウエ信仰を歌った信仰の書であり、旧約聖書中の多くの概念や思想が結集されていると考えられる。しかも新約聖書の福音書におけるイエス・キリスト自らの旧約聖書の引用は、詩篇からが一番多く、パウロをはじめとする新約聖書の著者たちも詩篇からの引用を多くしていることは注目値する。④そして古代イスラエルから初代教会を経て、現代に至るまでの諸時代を通じて詩篇が個人的に生活の中で、あるいは祭儀的に教会の礼拝の中で用いられてきた事実は重要な意義をもつ。それゆえ詩篇研究は神に対する信仰の歴史的な流れをさかのぼることを得さしめ、又その信仰の源から下流へと下ることを可能にし、信仰における深い洞察と確証を与えるものであると考える。換言すれば、詩篇は単に古代イスラエル人のものにとどまらず現代に生きる

私たちの信仰の源泉であり、詩篇研究により、古代の信仰者は何を考え、何を神に祈り、何を期待し、又どのようにしてその目標・理想に向つて信仰の道を歩んだかを知ることが可能になると筆者は考える。

かかる背景のもとで、特に詩篇の中に見出される用語「דָּרֶק derek「道」は古代イスラエル人のヤハウエ信仰を解明する一つの鍵を与えるものであると考える。彼らが「道」という用語を使う時、一体、何を連想し、何を意味したか、その神学的意義を探ってみたい。又、日本という脈絡における「道」概念との比較をも試みてみたい。

方法論としては、まず「道」derekの旧約聖書における用語としての分布を律法(トラー)、預言書(ナビーム)、詩文書(ケスビーム)に分けて調べる。次に詩篇における derek の用法について詩篇中の全引用箇所を列挙しその特徴を調べる。さらに文脈的考察を加え、詩篇における「道」derekの神学的意義を考える。最後に日本の「道」について簡単にふれる。尚、聖書は特記のない限り日本聖書刊行会のもを使う。

## 一、旧約聖書における derek の分布と用法

### (A) derek の分布

律法、預言書、詩文書の各区分における derek の分布は、⑤律法の書に一一五回、預言書に三七一回、詩文書に一一三回出てくる。又、各書の中で derek の使用頻度数の高いものをあげるとエゼキエル書の一一五回、箴言の七六回に次いで詩篇は六六回である。次にエレシヤ書に五七回、申命記、イザヤ書に四七回、列王記第一に四五回と続く。尚、時代的には、創世記、出エジプト記から捕囚期のエレシヤ書、エゼキエル書、さらには捕囚後のハガイ書、ゼカリヤ書、マラキ書にも使われていることがわかる。旧約聖書全体では合計六九九回使用されている。

前述の様に詩篇に derek は六六回使われている。その用法の分類は種々考えられるが、ここでは大きく、「主の道」主に属する道、「人の歩み」、「地理的な道」に分けて分析をする。

(A) 用法における分類

(1) 「主の道・主に属する道」

(複数) 一八篇二一節、二五篇四節、五一篇一三節、八一篇一三節、九五篇一〇節、一〇三篇七節、一一九篇三節、一一九篇三七節、一二八篇一節、一三八篇五節、一四五篇一七節 ……計一一回

(単数) 五篇八節、一八篇三〇節、二五篇八節、二五篇九節、二五篇一二節、二七篇一一節、三二篇八節、三七篇三四節、六七篇二節、七七篇二三節、七七篇一九節、八五篇一三節、八六篇一一節、一〇二篇二節、一〇二篇六節、一一九篇一節、一一九篇一四節、一一九篇二七節、一一九篇三〇節、一一九篇三三節、一一九篇三三節、一三九篇二四節、一四三篇八節 ……計二三回

二、詩篇における derek の用法

(B) derek の用法

エゼキエル書の derek の約半数が人の生活、人生の歩みといったいわゆる倫理的・道徳的用法であり、残りの大半は神殿の建物の規定に関する用法であり、「主の道」は四回出ている。箴言では全て倫理的・道徳的用法であり、エレミヤ書では過半数が倫理的・道徳的用法であり、イザヤ書は殆んどが倫理的・道徳的用法である。列王記第一では約六割が地理的用法であり、律法の書の創世記、申命記、民数記においては殆んどが地理的用法である。

derekの分布			
<u>律法</u>			
創世記	31		
出エジプト記	13		
レビ記	2		
民数記	22		
申命記	47		
	(115)		
<u>預言書</u>			
ヨシュア記	17	ヨエル書	1
士師記	15	アモス書	3
サムエル記第一	27	オバデヤ書	0
サムエル記第二	12	ヨナ書	2
列王記第一	45	ミカ書	1
列王記第二	22	ナホム書	2
		ハバクク書	0
イザヤ書	47	ゼパニヤ書	0
エレミヤ書	57	ハガイ書	1
エゼキエル書	105	ゼカリヤ書	3
ホセア書	8	マラキ書	3
		(371)	
<u>詩文書</u>			
詩篇	66	エステル記	0
箴言	76	ダニエル書	0
ヨブ記	32	エズラ記	1
雅歌	4	ネヘミヤ記	2
ルツ記	1	歴代誌第一	0
哀歌	6	歴代誌第二	25
伝道者の書	0		
		(213)	

(総計・699)

G. Lisowsky, Konkordanz zum Hebräischen Alten Testament  
 Stuttgart: Württembergische Bibelanstalt, 1958 から数えたもの。

(2) 「人の歩み」

(詩人の道・複数) 三九篇一節、九一篇一節、一一九篇五節、一一九篇二六節、一一九篇五九節、一一九篇一六八節、一一三九篇三節  
……計七回

(詩人の道・単数) 一八篇三二節、一〇二篇三三節、一三九篇二四a節  
……計三回

(悪しき者の道・複数) 一〇篇五節、三五篇六節、四九篇一三節  
……計三回

(悪しき者の道・単数) 一篇一b節、一篇六節、三六篇四節、三七篇七節、一〇七篇一七節、一一九篇二九節、一四六篇九節  
……計七回

(一般論として) 一篇六a節、二篇一二節、三七篇五節、三七篇一四節、三七篇二三節、五〇篇二三節  
……全て単数・計六回

(3) 「地理的な道」八〇篇一二節、八九篇四一節、一〇七篇四節、一〇七篇七節、一〇七篇四〇節、一一〇篇七節  
……計六回

(B) 特徴的分析

前述の列挙された箇所から derek に関連する特徴を抽出する。まず「道」と並行的にしかも同義的に使われている名詞に着目すると、

あなたの道||み救い(六七篇二三節、五〇篇二三節)、主の道||主のみわざ(一〇三篇七節、一四五篇一七節)、あなたの道||真理(八六篇一一節)、全き道||主のみおしえ(一一九篇第一節)、神の道||主のみことば(一八篇三〇節)、あなたの道||さとしの道(一一九篇一四節、一一九篇五九節、一一九篇一六八節)、あなたの道||戒めの道(一一九篇二七節、一一九篇一六八節)、あなたの道||仰せの道(一一九篇三二節)、あなたの道||定め(一一九篇三三節)

三節)、あなたの道||おきての道(一一九篇五、二六節)、あなたの道||さばきの道(一一九篇三〇節、二五篇九節)があげられる。

次に「道」に関連する動詞に着目し列挙する。

守る *samar* (一八篇二節、三九篇一節、九一篇一節、一一九篇一六八節)

知る *yada'* (一篇六節、二五篇四節、六七篇二節、九五篇一〇節、一〇三篇七節、一三九篇三節、一四三篇八節)

歩く *halak* (八一篇三節、一〇一篇六節、一〇七篇七節、一一九篇三節、一二八篇一節)

数える *yarah* (二五篇八節、二五篇一二節、二七篇一一節、三三篇八節、一〇三篇七節)

数える *lamad* (二五篇九節、五一篇三節)

走る *rus* (一一九篇三二節)

堅くする(定める) *kdh* (三七篇二三節、一一九篇五節)

堅く立つ *yasab* (三六篇四節)

立つ *amad* (一篇一節)

見つけぬ *masa'* (一〇七篇四節)

悟る *sakal* (一〇一篇二節)

選ぶ *bahar* (二五篇一二節、一一九篇三〇節)

見る *ra'ah* (五〇篇二三節、一三九篇二四a節)

ゆだねぬ *gol* (三七篇五節)

導く *nahah* (一三九篇二四b節)

顧る hasab (一一九篇五九節)

数える sapor (一一九篇二六節)

等があげられる。

次に「道」を修飾・形容することばに着目すると、

まっすぐ、正しい (五篇八節、三七篇一四節、一〇七篇七節)

完全 (一八篇三〇節、一八篇三二節、一一九篇一節)

きよい (七七篇一三節)

とこしえ (一一九篇二四b節)

等があげられる。

以上より詩篇における derek 六六回中、約半数の三四回が「主の道、主に属する道」として使われており、他方、「地理的な道」は六回あるものの、いずれも倫理的・道徳的暗喩をもち、純然たる地理的用法はないと考えられる。又、複数と単数の使い分けについては、「主の道」と表現されている場合はすべて複数形であり、形容詞がつく場合は必ず単数である。これは総体的単数と考えられるが、主の示される道・人の歩みは、その部分の道々とそれを総合してなる一つの道と考えることができ、複数と単数の用法の間には明確な差異がないと思われる。

又その同義語から考えられることは「主の道」に関連する用法では「道」は主の救いのみわざに関連し又、その救いに至らせるための重要な基準である。又関連する動詞群からは、「道」は何か外から与えられた究極の目標(守る、知る、数える、堅くする、見つける、悟る、遠ぶ、見る)であり又同時にその目標に至る過程(歩く、走る、ゆだねる、顧る)であり、その前進のための基準でもあると考えられる。又関連する形容詞からは「道」は十分信頼するに

足りるもの(正しく、きよく、完全、とこしえ)であると言える。

### (C) 積義的考察

前述の「道」の分類のうち、特に

重要な「主の道」の用法の多く見られる一一九篇二五～三二節と、「地理的な道」の用法の多い一〇七篇一～九節を積義し「道」derek の神学的意義を考察する。

#### (1) 詩篇一一九篇二五～三二節の積義的考察

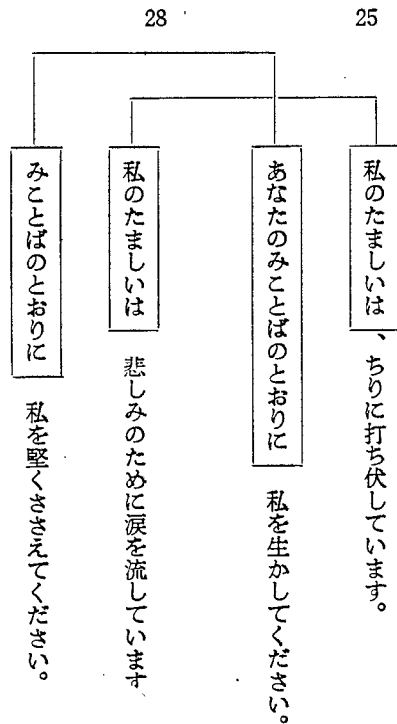
一一九篇の二五～三二節の各文の頭文字は全て delet で始まる。まず二五節の「私のたましいは、ちりに打ち伏しています。」とは私のいのちが滅びるばかりであるこの意味である。<sup>①</sup> dabag は「ぶっく」の意で、人間が創られた元の土に帰るといふことと「地に落ちる」との意味に通じるものと考えられる。Athah 以下は、この様な現実から立ち上るために「あなたのみことばのとおりに私を生かしてください。」であり、このみことばに従ってこそ私たちの生がある hayah のだという。ここでは「たましいがちりに打ち伏す」というのと「生かす」という表現が反意的に並行法をなしている。

二六節は「私の道を申し上げた。」の「申し上げた」は sapor の Piel 形で単に語るといふのでなく「数える」の意味があり二五節のたましいがちりに打ち伏す、つまり死ぬばかりの状況に至るまでの過去の自らの歩み derek を顧みてヤハウエの前に全てを数えるようにして語ったと考えられる。「それで、あなたはあなたのおきてを教えるために私に答えられた。」(直訳)「おきて」bunqah は詩篇中には僅か三回しか出てこず。しかし創世記二六章五節にはアブラハムが「おきて」と「おしえ」torah を守ったとあり出エジプト記は七回 bunqah が出て、<sup>②</sup> これらすべてが「永遠のおきて」として用いられ、特に過越しの記念に過越しの祭りとの関連で用いられていることがわか

る。即ちこの *huqqah* は人の救いに關するヤハウエに屬する用語であることがわかる。つまり、死ぬばかりの私を真に生かすのは第一のヤハウエのおきて *huqqah* によることである。

二七節には、「あなたの戒めの道を私に悟らせて下さい。そうすれば私はあなたの奇しいわざに思いを潜めることができる。」(直訳) 人を生かす第二のことは、戒めの道を悟ることである。「戒め」*piqûdim* は旧約聖書中二四回あり、すべて詩篇の中にある。そしてこの用語と共に用いられている動詞が「悟る」「守る」「思ひ出す」「思いを潜める」等、前節の *huqqah* に伴う動詞と同じもの或いは同義の動詞が使われている。従って「戒め」*piqûdim* は「おぼし」*huqqah* と同義語と考へられる。「奇こらわざ」*paia* は詩篇中二六回あり、うち二五回は *Niphal* 形の分詞形で使われ、同形が他の旧約聖書中に一八回出ている。そのうちヨブ記の五回(創造のみわざ)を除いては、出エジプト記、ヨシユア記、士師記、歴代誌I、ネヘミヤ記、エレシヤ書、シカ書の二〇回で、いずれも出エジプトからカナン定着に至る神の救いのみわざについて *paia* の *Niphal* の分詞形で表現していることに注目したい。即ちこの二七節においても作者は「救い」を出エジプトのあの救いのみわざに投影させている。「戒めの道」それは出エジプトからの四〇年間の荒野での彷徨の中で地理的、生理的、心理的に厳しい現実の只中でその都度、現わされた神の戒めの道であり救いのみわざであった。ヤハウエがなされたそのみわざがこの作者の時代にあっても必ず繰り返し再現されると信じた。それ故「私にあなたの戒めの道、奇しいみわざを教え、思いを潜めさせて下さい。」(直訳) というのである。

二八節は再び二五節と類似した表現である。併記すると、



反復していることがわかる。ここでも、人を慰め激励するのはヤハウエのみことば以外の何ものでもない。「堅くちかえてください」は *qam* の *Piel* 形で「立ち上らせてください。力つけてください」の訳の方が適切ではないか。<sup>⑩</sup> 二九節は直訳すると「私から、いつわりの道を遠ざけてください。」であり「いつわりの道」がどこか遠くにあるのでなく、自らのところにある。そして「あなたのみおしえで私をあわれんでください」(直訳)「みおしえ」*to'rah* は旧約聖書中、詩篇に一番多く使われ三六回中二五回が一一篇にある。このトローラーという用語は狭義の律法(戒)を意味するのではなく広義のヤハウエのおしえを意味する。時にはモーセの律法(トローラー)として使われ又、前巻の *huqqah* や *misot*「おおせ・命令」*mispat*「おほき・公義」等と共に用いられている。<sup>⑪</sup> 続く三〇節は二九節の「いつわりの道」に対し「真実の道」を私は選んだ。そしてあなたの「おほき」*mispat* を私の前に置いたという。既述のように「おほき」は二九節の「みおしえ」と同義語である。私たちが選ぶべき道・真

実の道はヤハウエのおしえの道であり、ちばきの道である。mispai は特に申命記では buqqaḥ との併記が多く見られる。<sup>⑤</sup>つまり「おきて」buqqaḥ と「おはき・定め」mispai とは一組のものとして同義的・等価的に用いられていることに気付く。これは単に漠然としたものでなく具体的な出来事、出エジプトの救済の業と荒野の彷徨におけるヤハウエの導きに塑るものと考えられる。

三一節は直訳すると「私はあなたのおしえの中にくっつく」であり dabaq は二五節にも使われ、二五節が死を意味するところの「土にくっつく」に対し「ヤハウエのおしえに密着する」という対比を見る。だから「ヤハウエよ、私に恥をかかせないでください。」という。私たちがヤハウエの「おしえ」peḥat の中に密着している時、恥を被ることがないのである。peḥat は出エジプト記に二一回、詩篇に一六回と頻度数では出エジプト記に多くその大半は契約の箱の中に入れる「きとし」つまり二枚の「あかし」の板のところを用いられている。又歴代誌第一・第二や列王記第二等には前述の buqqaḥ や miswah と併記されヤハウエに属する用語として用いられている。<sup>⑥</sup>

三二節「私はあなたの仰せの道を走ります。あなたが、私の心を広くしてくださいからです。」は二五節からのダレットで始まる段落のまとめの部分であると考えられる。「心を広くされる」のは二五節の「あなたのおしえ」、二六節の「あなたのおきて」、二七節の「あなたの戒め」、二八節の「奇妙いわき」、二九節の「あなたのおしえ」、三〇節の「あなたのおはき」、三一節の「あなたのおしえ」によってである。或いは三二節の「あなたの仰せ」を同義語と解釈することもできる。即ち二五節からこの三二節まで、一貫して主導権はヤハウエの側にあるということを知らなければならない。私を真に生かすのはヤハウエの「みことば」(二五・二八節)であり「おきて」(二六節)、「戒め」(二七節)であり、「みおしえ」(二九節)であり「ちばき」(三〇節)であり「おしえ」(三一節)であり「仰せ」(三二節)である。<sup>⑦</sup>詩篇は詩文であり特にこの二一九篇は字隠しの技巧、語呂合わせの必要

素が多くみられる。しかしここにあげられた七七八の同義語は、<sup>⑧</sup>そのような単なる語呂合わせでなく、前述した様にこれらの用語の併記や組み合わせ方は、他の旧約聖書中に、とりわけ出エジプトの出来事に密接に関係していることが判る。<sup>⑨</sup>

以上の観点から、「道」dereḥ を考える時、例えば二六節の「道」は自らの人生の歩み、生活を表わし、二九節、三〇節の偽りの道・真実の道も人生・歩み・生活を表わしていると考えられる。しかし三二節の「仰せの道」を考へる時、二六、二九、三〇節のそれぞれの「道」は出エジプトの救済の出来事に思想的・論理的背景をもつものであると考えられないか。つまり約束の地に至るまで、「みわき」あり「おきて」あり「戒め」あり「ちばき」あり「おしえ」があり「仰せ」がありそしてこれら全てを包含してヤハウエの「みことば」があった。又途上の苦難、試練、飢餓、不真実等の経験とそれらの中からのヤハウエの救いは、人のたどる人生と類似している。尚「道」の動詞 darak は「踏み固める」の意味でその Hipil 形は「導く」の意味がある。出エジプトと荒野での四〇年間の彷徨それは文字通り「道」を踏み固め、ヤハウエに導かれ、時には戒められ、さばかれ、悟され、おきてが与えられ、みことばに教えられてヤハウエの仰せの道を歩む人生の旅であった。

## (2) 詩篇一〇七篇一〜九節の積義的考察

一〇七篇は詩篇の第五巻の最初にあり時代的には捕囚後に作られたと考えられている。<sup>⑩</sup>

一節は「主に感謝せよ」そして原文では二つの持続詞 *hāy* に導かれ「いつくしみ深い」と「恵み」とが対称的同義的に置かれている。

1 主に感謝せよ。主はまことに

深く。

その恵み

はとこしえまで

「いづくしみ深く」は *toḥ* で詩篇一〇六篇一節と同様に慣用句的に用いられている。<sup>⑧</sup>

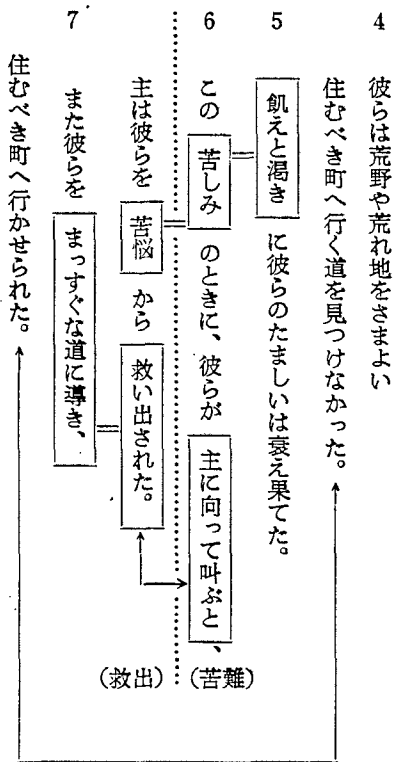
二節・三節において、その詳細の内容が歌われている。三節の「国々から」*miyam* の直訳は「海から」であり七十人訳聖書も *dyasosa* 「海」としている。このことから「彼ら」とはバビロン捕囚の民と考えられている。歴代誌第一・九章二四節では *yam* を「西」、*negeb* を「南」と訳すがこの一〇七篇では「西」は *ma'rab* で語源は「日が沈む方向」を示す。又「贖われた者」*g'u'ley* の歴史的事実としての引用は、殆んどが出エジプトの救済に関連して使われており、僅かミカ書四章一〇節にバビロン捕囚からの贖いについて述べられている。

四節の「荒地地」は七十人訳聖書では *kuḥpoc* で砂漠と考えられる。そして彼らは「住むべき町へ行く道を見つげなかった」。「この「住むべき町へ行く道」は定着の場所、人の住む町などの解釈があるが、<sup>⑨</sup>ここはやがて落ち着くところの目的地と考えた方が文脈的に適切である。なぜなら七節にも「住むべき町」があり、五節・六節の「飢えと渇き」と疲労困憊の中からヤハウエに助けを求め、ヤハウエは彼らの苦しみから彼らを救われ、その目的地に導き入れられたとなるからである。従って救いという観点から、「道」*derek* は地理的な道であると共にヤハウエの救いの道とも考えられる。五節の「飢え」、「渇き」は続く「たましい」に関することともとれる。この場合、ヘブル思想の「たましい」*ropeš* はギリシヤの靈肉二元論でなく「生命」を表わし又、*y'sarah* は「まっすぐ」よりも「正しい」という意味の用法が殆んどであり「正しい道」と訳した方が適切である。特に「道」と共に用いられる場合はヤ

ハウエの属性と考えられる。

六節については *Athnah* によって区切られた二つの文の「叫ぶ」と「救い出された」では人称が変わり、「叫んだ」その結果、主が彼らを「救い出された」と解する。

七節については前述の四節からの内容を含めて考えると、四・五・六節前半の問題の投げかけに対して六節後半と七節で答えると共に四節と七節の反意表現により、総合と強調を示していると考えられる。



=同義  
↔反意、応答

即ち「救い出す」とは「まっすぐな道・正しい道」に導き入れる (*darak* の *hiphil* 形で詩篇では四回出ている。<sup>⑩</sup>) ことであり、この場合「道」*derek* は救いそのものであり、救いの道程でもあると考えられる。八節は一節と同義的パラレルリズムで二七節の故に「主に感謝せよ」と歌う。「奇しいわざ」は救いのみわざであり「人の子ら」*beney 'adam* に現わされたのである。「人の子ら」は一〇七篇に八、一五、二二、三二節と四回あり、

も、ヤハウェへの信仰にかかわりをもつといえる。さらに「ヤハウェの道」に関するものは歴史的意義をもつと考えられる。イスラエルの民がエジプトを出てからの四〇年間の荒野での彷徨を経て、やがて約束の地カナンに至る道程の上に現わされたヤハウェの救いのみわざに関連する歴史性を「道」derek はもっていると考えられる。特に「道」(複数)はヤハウェの「おしえ」、「みことば」、「さとし」、「戒め」、「仰せ」、「定め」、「おきて」、「さばき」等の用語と同義的・等価的に使われている。これらの用語は詩篇以外に旧約聖書中(例えば創世記、出エジプト記、申命記、歴代誌第一、第二、列王記第一、第二等)にも、それぞれの併記が多く見られ、出エジプトの救いのみわざに言及して用いられている用語である。一〇七篇のように捕囚からの帰還について書かれているといわれるものであっても、エジプトからの救いと捕囚からの帰還を重ね合わせて人々はヤハウェの救いを考えていたということができるとはでないか。つまり derek は、あの出エジプトの出来事、すなわち葦の海を渡り、四〇年間の荒野での彷徨の道の中で、つぶやきと偶像礼拝をもって神を否んだイスラエルの民を、おしえ、戒め、さとし、激励し、真の歩むべき道・生き方を示しやがて約束どおり、カナンの地に導き入れられた救いのみわざがこの derek の用語の背景に基本的にあってはならないか。従って「道」derek を単に人生とか生活様式とか道徳行為<sup>⑧</sup>というように表面的形式的に理解することは浅薄である。むしろ出エジプトからカナン征服、定着さらには王国時代、捕囚時代へとこの derek の概念が、ヤハウェとイスラエルの民の歩みとの関係においてイスラエルの歩み(歴史)が提示する「生き方」として受継がれていったと考えられないか。<sup>⑨</sup>

他方、derek に関連して使われている動詞で頻度が高いのは「守る」、「知る」、「教える」であり、このことから考えられることは derek は何らかの法のようなものであるということである。しかし derek は現代のユダヤ教の「ハラカー」<sup>⑩</sup>ではない。むしろ「救い」であり「いのち」であり神から与えられるものである。derek は救いそのものであり、救いのみわざが具体化する過程で示される「おしえ」であり、「定め」であり、「みことば」であり、「仰せ」である。時には「さとし」、「戒め」、「さばき」となる。荒野や砂漠で道に迷うことは死を意味する。しかし、たゞい糾余曲折があり凹凸の道であってもヤハウェの「道」は「完全」(一八篇二十節他)で「正しい」(一〇七篇七節他)道である。又、この道こそが「とこしえ」(二三九篇二四節)の救いに至ることができる「道」であり、統合的に他に類のないヤハウェの「道」(単数)である。

(B) 日本的な「道」とのかかわりにおいて

日本で「道」と名のつくものには、神道、仏道(仏教)、茶の湯道、能芸の道、武芸の道、兵法の道、柔道、剣道、歌道等がある。道元は、正法眼蔵十二卷本発菩提心で「道心をおこして修行するのが獲得すべき究極最上の知恵であり、それをうることによって修行者が仏になるとされる当のもの——菩提それが道」<sup>⑪</sup>だといった。又、茶の道については「規定性・向上性や教育性ばかりでなく、柔軟性や延展性をすなわち包摂力を持っている」<sup>⑫</sup>。そして「道」は、茶道でありつつ成仏とか死後の平安とか菩提の意を持たされていよう。しかしまた同時に「道」としてそういう境地状態に到達するまでの行程・足の運びの意がそこにかぶさって来ていると思われる。換言すれば、この「道」は果であり同時に因、業なのだ<sup>⑬</sup>という。総じて「道」について「ドウと読むにせよみちと訓むにせよそれには少くとも二つの意味すなわち部門、領域、世界の意と神髄、理想、規範ごとき意と二義ありそれらがひとつづきの言説の中で重なるように用いられていることが少くない<sup>⑭</sup>」<sup>⑮</sup>と述べている。以上のこれらの見解は何らかの形で前述の道元のことばにあるように仏教的、儒教的背景を或いはその関連性をもって考えると考えられる。そこには聖書のいう神と人との関係の「道」というより、むしろ人の方に重点が置かれ、自分自身がその道になってゆくのであってその到達点は神でなく自分ならざる自分であると考えられる。



他方、日本の神道についてみると、本居宣長は「そも此の道はいかなる道ぞやと尋ねるに天地のおのずからなる道にもあらず、人の作れる道にもあらず此の道はしも可畏きや高御産巢日の神の御霊によりて、天照大御神の受けたまひたもち伝え賜う道なり。故れ是を以て神の道とは申すぞかし」という。つまり自然の道でもなく人の作る道でもなく天照大御神が受けられ伝えられた道であり、これを神の道というのである。又、平田篤胤は「神国の神国たる御国体を知り神の成し置き玉へる事を習ひ学びて、正しき人の道を行き候を実の神道と称し候。すべて世の忠臣孝子、其の外、人の道に外れざる者は皆、真の神道にて候」といっている。つまり神の国を知り、神がなされ置かれたことを習い学んで正しい人の道を行うことをほんとうの神道という。従ってこの日本古来の神道の「道」概念は旧約聖書とわりわけ詩篇の「道」の概念とはある種の近似性をもっているといえる。即ちそれは人の作る道でなく神が示された「道」であり、神と人との正しい関係における「道」である。しかし乍ら、日本の神道の「道」は人の側からはある一定の距離と隔たりをもつと感じられるのに対し、詩篇の「道」は出エジプトから始まるころの歴史的な出来事を通して示され、これらの事柄が人々の「生」にとって決定的な出来事として以降の歴史を貫いて継承されているという現実性を強く帯びた救いの概念であるという違いである。

門脇佳吉氏は、荘子の思想の影響を受けた芭蕉の俳諧の道と求道(ぐどう)の旅人・道元の禅思想から日本の「道」を分析し日本の神学の構築を試みている。そのアプローチはキリスト教を道なるキリストを求めるキリスト道としてとらえ、芭蕉や道元の東洋的・日本的「道」が究極目的でありつつ同時にその目的へとかりたてと内在的原動力であり、感ぜられる追体験であると述べている。これは前述の寺田氏のいう「果、因、業」の考え方と似ている。同時に今まで述べてきた詩篇の「道」概念とも類似しているように思われる。つまり、詩篇における「主の道」は出エジプトから荒野彷徨を経て目的地のカナンに定着するまでのイスラエル人が神ヤハウエのかかわりの中で経験した様々な試練との苦闘の道であり救いの道でもあった。従って詩篇の「道」は究極の目的であると共に道程でもある。しかもこの「道」自体に「道」を歩む原動力が内在している。さらにこの「道」を通して約束の地に入る救いの出エジプトを追体験することのできる「道」である。

## 結 び

以上、詩篇における「道」の概念について述べてきたが、紙面の制約上、新約聖書における「道」*dos* とのかかわりにについては割愛をした。筆者はこの詩篇の「道」概念が新約の道なるイエス・キリストへと受け継がれていると考えている。又、さらにユダヤ教との関連をも見る必要があると考える。このようにして聖書が語る「道」概念を、日本というコンテキストの中で、どのように理解し適用していくかは福音宣教の観点から重要な課題の一つであると考えらる。

### (注)

本小論は一九八六年十一月一七日、日本福音主義神学会西部部会九州地区で発表したものに更に手を加え再構成したものである。

① G. L. Archer & G. C. Chirichigno, *Old Testament Quotations in the New Testament: A Complete Survey*, Chicago: Moody Press, 1983, p. 176. 46の筆者が数えたものの、福音書には詩篇からの引用は二六回(一巻五回)、次五回、マタイ福音書が二一回、申命書が一九回である。

② A. M. Harman, "Aspects of Paul's Use of the Psalms", *Westminster Theological Journal*, XXXII (1969), p. 23. 24, 29. 新約聖書中、約ナがパウロの旧約聖書からの引用でこれらの約ナが詩篇からの引用で(筆者が数えた二七回)マタイ福音書に次ぐ。



23 Condon, *Englishman's Hebrew and Caldee Concordance of the Old Testament*, London: Samuel Bagster and Sons Ltd., 1963 5th Edition p. 285, 286.

24 J. W. ロッシャーン他『詩篇II七三—一五〇』一六一頁。

25 O. F. キンタン『ケブル思想の特質』一五六一—一五七頁。

26 Brown-Driver-Briggs, *Hebrew and English Lexicon of the Old Testament*, Oxford: Oxford Univ. Press, 1906, reprint, 1959. p. 446-447. "The way of the Lord is sometimes qualified by a simple adjective, such as good... right... perfect... These expressions are not to be interpreted without reference to God."

27 詩篇二五篇五、九節、一〇七篇七節、一一九篇三五節。

28 関根正雄「古代ヘブライ詩文の『切れ』」『聖書ヘブライ語』第五号(一九八六)一三七—一三八頁を参照。ケナンの詩は聖書協

29 会訳は理由を導く接続詞と解し、聖書刊行会訳では「きこと」と訳し、幾分「切れ」を込め詩文の詩の味わいをもたせている。J. Burnier, "way", *A Companion to the Bible*, (J.-J. Von Allmen, general editor), New York: Oxford Univ. Press, 1958, p. 446-447. "The way of the Lord is sometimes qualified by a simple adjective, such as good... right... perfect... These expressions are not to be interpreted without reference to God."

30 G. フォン・ラート『旧約聖書神学』イスラエルの歴史伝承の神学、荒井章三訳(日本基督教団出版局、一九八〇)一六一頁。「イスラエルでは最初から最後まで『ロコス』よりも出来事が絶対的優位を占めているのである。……ケブル的思考は歴史的諸伝承における思考である。」一六七頁には「この歴史の決定的出来事のもがイスラエルの信仰の対象であり同じくまたその全叙述が、信仰の業なのであった。」

31 石川耕一郎『常態としてのティマスボラ』聖書とオリエント世界(山本書店、一九八五)二〇七頁。ユダヤ教理解の一視点として、その信仰は「奴隷生活を強いられたエジプトから民を救い出し、カナンの地に導いた神の恵みであり、またかつて捕囚の民を帰還せしめたあの番きの背後になお秘められていた神の救いの業であってその神は決して離散のままでは自分たちを捨てお

32 33 W. H. シュニット『歴史における旧約聖書の信仰』山我哲雄訳(新地書房、一九八五)一五頁。「旧約聖書の信仰は歴史への密接な関わりを特色とし……その理解のためにはイスラエル民族の辿った実際の歴史を知ることが不可欠である」二二頁には「荒野の時代への適及的言及がイスラエルの歴史的自己理解にとって基本的な意味を持つ」。

34 C. A. Briggs, *A Critical and Exegetical Commentary on the Book of Psalms* (T. C. C.), I, p. 8

35 T. ホーマン『ヘブライ人とギリシヤ人の思维』植田重雄訳(新教出版社、一九八四、第六刷)二八二—二八三頁。「イスラエル人にたいし神は自己を歴史に指示して、イデアの中に啓示しなかった。……神は必要とあれば契約と祝福の言葉によって歴史の歩みを動かし、歴史を看視し、自ら行動おこしてこれに参与する。……祖先も現在生きている人々も一つである。神は祖先になしたことを、現在の我々になした。」

36 E. フロム『ユダヤ教の人間観』飯坂良明訳・現代思想選四(河出書房、一九八〇)二四一頁。「聖書以後の伝統は、律法を拡大発展させた。そして人間の行動のあらゆる側面を網羅するハラカー(道)法の大系を作り上げた。」

37 寺田透『道の思想』(創文社、一九七八)五頁。

38 前掲書 一三〇頁。

39 前掲書 一三二頁。

40 前掲書 二〇〇頁。

41 浅野順一『旧約聖書と現代』(玉川大学出版部、一九七〇)二八頁。小平尚道氏が浅野順一氏に聞く形で「キリスト教の律法とというのは、神と人間との関係が主体になって、それから人間と人間との関係が出てくるわけですが、仏教の場合には絶対者と人間との関係の法というものはなく、戒律というのは、やっぱり人と人の、お坊さんとお坊さんのお寺の中の戒律になってくるというところを、はっきり、私達は知っておく必要があります。」

42 「万有百科大事典四」『哲学宗教 GENRE JAPONICA』(小学館、一九八二)の「神道」本居宣長の「直毘靈なかびのみたま」

43 C. トレモンタン『ケブル思想の特質』西村俊昭訳、一三三頁。「出エジプトの動作、遊牧生活の動作、砂漠の横断、これらの動作は恒久的なものであって、意味をもっている。なぜなら、それらは形而上学的にイスラエルという事象の一部を構成しているからである。聖書の歴史の恒久性、その予言者的射程は、イスラエルの形而上学的構成に基づいている出エジプトの動作は意味をもっている。なぜならイスラエルとは単に人種的事象であるだけでなくまた神と保わる事象であり、そしてこの事象はアラハムと共に生まれ、しかもこの新しい霊的人類の中で霊的に生きる、このすべての民と共に継続しているからである。(傍線筆者)

- ④③ 門脇佳吉「道の神学序説(一)『世紀』(世紀編集室 一九八五) 一月号、八七頁。
- ④④ 前掲書、五月号、八二―八三頁。
- ④⑤ 門脇佳吉「道の神学序説(一)『世紀』(世紀編集室一九八七) 一月号、九二頁。  
④⑥ ④⑤を註釋轉中、一〇二―一〇三頁。特にヘブライ語の「*Byah elu*」が④⑥(「*mon*」一四章六節)で、使徒の働きに見られる「この道の著」が④⑥が九章二節、一九章九・二三節、二二章四節、二四章一四節等の考察が「この示唆を手えたと考ふる。参考文献として次のものを挙げておこう。」
- J. H. Bernard, *A Critical and Exegetical Commentary on the Gospel According to St. John*, Vol. II, Edinburgh, T. & T. Clark, 1953, p. 537.
- シータソリーナ・シヤンソ、『ジョンネによる福音書』N.T.D.新約聖書註解、松田伊作訳(N.T.D.新約聖書註解刊行会 一九七五) 二四二頁。
- 間道洋助『「*mon*」福音書のキリスト論』(聖文舎 一九八四) 一四六頁。
- R. J. Knowling, *The Acts of the Apostles* (Expositors Greek Testament), Vol. II, ed. by W. Robertson Nicoll, Grand Rapids: Wm. B. Eerdmans Pub. Co., 1956, p. 230.
- G. E. Ladd, *A Theology of the New Testament*, Grand Rapids: Wm. B. Eerdmans Pub. Co., 1981, p. 271
- H. H. ノルメス『使徒行伝』新約聖書註解(聖書図書刊行会 一九七〇) 三則)等。
- ④⑦ 参考文献として次のものを挙げておこう。
- Emil Schürer, *The history of the Jewish people in the age of Jesus Christ*, Vol. I/II/III 1/III 2, Edinburgh: T. & T. Clark Ltd., 1973/1979/1986/1987.
- Roland de Vaux, *Ancient Israel* (Its Life and Institutions), English trans. by John Mohlugh, New York/Toronto/London: McGraw-Hill Book Co., Inc., 1961.
- J. Pedersen, *Israel* (Its Life and Culture) I-II/III-IV, London: OUP, 1926/1940.
- H. リンズレン『「*mon*」宗教学史』荒井章三訳(教文館 一九七〇)等。  
(大阪日本橋キリスト教会牧師・大阪キリスト教短期大学神学科専任講師)